The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語におけるアクセントの逸脱による違和感の要因：日本語母語話者および日本語学習者について
Author(s)	韓, 喜善
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 31-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88406
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語におけるアクセントの逸脱による違和感の要因

−日本語母語話者および日本語学習者について−

韓 喜善

要旨　本稿は、日本語におけるアクセントの逸脱に対する違和感にはどのような要因が関わるかについて、先行研究を概観し、その要因をまとめたものである。「語の長さ」「音節構造」「品詞」「語種」「母音の広狭」「馴染み度」「方言によるピッチのレンジの解釈の違い」「人名や地名」「アクセントの変化の途上にある語の新旧」「ミニマルペアを持つ語において相対的に頻用語かどうか」「文環境の影響」など様々な要因が関わっていることがわかった。今後、これらの要因について日本語母語話者と学習者の両面から同一の視点で検討を行うことで、アクセントの逸脱に対する違和感がどのように感じられるかを明確にしていく必要がある。

1. はじめに

標準日本語のアクセントは、語ごとにアクセント型が恣意的に決まっており、それを個別に覚えなければならないため、学習者にとって学習の負担が大きい項目だと言える。一方、日本語には多種多様なアクセントがあることも知られており（上野 1996、窪薗 2021）、学習者に限らず、日本語母語話者にとっても他方言のアクセントの習得は決して容易ではない。そのため、標準日本語のアクセントの逸脱が与える違和感の要因とは何かを明らかにすることは、アクセントの基礎研究として学習者と日本語母語話者の両方にとって意義がある。本稿では、アクセントの逸脱に対する違和感について検討する上でどのようなことを考慮すべきかについて、日本語母語話者の場合と日本語学習者の両方の場合について先行研究を概観し、今後の課題を明確にする。

2. 標準日本語においてアクセントの逸脱が標準日本語母語話者に与える違和感の要因

アクセントの機能としては、語の弁別、自然さ、統語機能（境界表示機能）が挙げられるが、このうち語の弁別については、声調言語の中国語（71%）に比べると、標準日本語（14%）はアクセントによる語の弁別の機能は低いことが知られている（柴田・柴田 1990）。そのため、実際にはアクセントを誤っても文脈に助けられて話し手の意図が通じる場合もしばしばある。しかし、聞き手には何らかの違和感を与えかねない。以下、標準日本語（以降、日本語と称する）のアクセントの逸脱に影響を及ぼす要因を検討した論考をみていく。

(1) 語の長さ（モーラ数）

日本語では語の長さが長くなればなるほど、その分アクセント型も増えていくため、1 モーラよりは 2 モーラ語、2 モーラ語よりは 3 モーラ語という具合に、理論的にあり得る逸脱も増えていく。

2 モーラ語では、アクセントの違いが弁別的な意味を持つものがかなり多くあるが（雨・飴、柿・牡

蠣、桃・腿、端・箸・橋)、3 モーラ語ではそういうものもあるものの（変える/蛙・帰る)、「モデル」「ギター」「バイク」「ビデオ」のようにかつては起伏型で発音されていた語が平板型に変化していく「平板化」という現象があり、日本語母語話者に出てくる変異としてのスタイルや使用者層を反映する「ゆれ」もみられる。さらに、4 モーラ名詞では「建物」「飲み物」「食べ物」「生き物」のように許容されるアクセントが複数ある語（低高低低、 低高高低）も見られる（郡 2018)。

なお、そもそもモーラ数ごとにアクセントのパターンの分布も異なるため（杉藤・田原 1989)、少ないアクセントのパターンには違和感を感じやすい可能性があり、語の長さによってどのパターンに違和感を感じやすいかも異なることが予測できる。このように、モーラ数による逸脱の意味合いも異なるため、アクセントの違和感の検討はモーラ数ごとに分けてアクセントの逸脱について検討する必要がある。

(2) 音節構造

同一の長さの語であっても、特殊拍を含むか否かがアクセントのパターンを変える要因になっていることが知られている。Kubozono (1996)は、4 モーラ語の外来語の場合、語全体が軽音節で構成される場合（55%）や語末から 2 モーラ目までが軽音節で連続する場合（45%）は平板型のアクセントになる傾向があると報告している。しかし、同じ 4 モーラ語でも重音節が 2 つ並んだり（7%)、軽音節を前後にして重音節が語中にあったり（24%)、語末に重音節がある（19%）と平板型にはなりにくいことも報告されており、語の音節構造はアクセント型を左右する上で重要な項目であることがわかる。しかし、これはあくまで 4 モーラ語に限られた場合であり、上記のテスト語の語末にさらに一つモーラを足し、5 モーラ語にして語の中での音節構造の配置が変化すると、アクセントのパターンは 4 モーラ語のときとは異なるアクセントに変わることも報告されている（窪薗 2006)。

(3) 品詞

上記で述べたように、日本語のアクセント型は語の長さに比例して増えていくということだったが、これはあくまで名詞の場合である。たとえば、形容詞や動詞では語の長さに関係なく、辞書形の場合大まかに 2 つのパターンがあることが知られている。活用による語尾の変化があっても名詞のようにアクセント型が語の長さに比例することはない。そのため、動詞や形容詞では逸脱形への違和感は相対的に大きい可能性がある。このことから、アクセント調査においては品詞を考慮し、品詞別に検討を行う必要がある。

(4) 語種

語種については、「和語」「漢字語」「外来語」の単純名詞について、『新明解日本語アクセント辞典第 2 版（2017）（以下、アクセント辞典と称する)』におけるアクセント習慣法則を検討する。

まず、アクセント辞典によると、和語については、法則らしいものは見られず、個別に覚えるしかない。しかし、「ケチ」「デブ」「バカ」のように、親愛・軽蔑の意味を含み、人間の種類を表す 2〜3 モーラ語は頭高型になるとされている。同じ語種の中でも相手を形容する語についてはアクセントが逸脱した時に語の意味とは相反する印象を与えたり、逆により意味合いを強める印象を与えるのではないかと考える。

次に、アクセント辞典によると、漢語については、1 モーラ語では 7 割は頭高型の場合が多く、頭高が優勢であるためなのか本来平板型の語であっても日常あまり使用されない語も頭高型として生成され

る場合もあると述べられている（例.　魔、麩、愚、義）。2 モーラの漢字語についても大半は頭高型だが、「敵」「客」「式」「肉」「服」「吉」「骨」のような「キ」「ク」「チ」「ツ」で終わる漢語は、尾高型（肉、服、吉、骨、式）、平板型（敵、客）の語が比較的多く、分節音の影響も見られているとされ、日常頻度が多い漢字語は平板化する傾向があるという（例. 音、順、晩）。

外来語は、アクセント辞典によると、2 モーラ語と 3 モーラ語は原則として頭高型になる（例. ジャム、ピン、クラス、ケーキ）。しかし、4 モーラ以上の語では、後から数えて 3 モーラ目にアクセント核が置かれる場合が増えていく（例. アパート、オレンジ、ヨーグルト、ダイヤモンド、ジャーナリズム）とされている。なお、外来語には尾高型は現れにくい（窪薗・田中 1999）。

このように、アクセントのパターンは語種によってその分布がそれぞれ異なる。また、語の性格、分節音、語の長さも関与しており、アクセントの逸脱の分析においてこれらの要因も考慮する必要がある。

(5) 母音の広狭

/i/と/u/のような狭母音はその前後に無声子音がある環境や語末に置かれた場合、母音の無声化が起きやすくなる。母音が無声化すると、そこにはピッチの山を置けなくなり、「菊」の例のように「高低」から「低高」のアクセント型になる。したがって、アクセントの逸脱に対する違和感については、母音の無声化の影響も考慮した上で、テスト語を決める必要がある。

一方、語末にどのような母音が来るかによってアクセントのパターンが決まることがある。窪薗・田中 (1999)によると、4 モーラ語の外来語で、語末に自立拍が 2 つ続いた音節構造で、語末に口の開きの大きい母音（/a, e, o/）が来れば、平板型になりやすいという（例. アメリカ、ラザニア、ウクレレ、モルヒネ、エジプト、ストロボ）。

(6) 馴染み度

「ギター」「サーファー」「パーティー」「彼氏」「図書館」のように本来は平板型ではなかった語が平板型として発音されることがある（湯澤・松崎 2004）。現代において、標準日本語では話者にとって馴染みを感じるものは平板化することが知られている（窪薗 2006）。つまり、身近に感じる対象について、アクセントの下がり目のないパターン、アクセントを持たないパターンを用いる傾向があるのではないかと解釈できる。音声の高さの変化に対する調音の労力軽減として解釈できる。

しかし、このような馴染み度については当然個人差があることが考えられる。例えば、音楽に詳しく、野球の話題にうとい人であれば、音楽のベースは「低高高高」、野球のベースは「高低低低」のように使い分ける可能性もある（湯浅・松崎 2004）。したがって、本来起伏式のアクセントが平板化した場合の違和感の有無や程度の違いには、個々人における語の馴染み度が大きく関与していることを考慮し検討していく必要がある。

初めて耳にするアクセント型に対する違和感、たとえば関西方言の「手袋（低低高低）」のように東京アクセントとして存在しない型には抵抗が大きいことが予測できる。具体的にどのようなアクセントのパターンが逸脱に影響を与えるかを把握する必要がある。

また、アクセントの変異形に対してそれを単に「変」に感じる場合だけでなく、「嫌い」というように嫌悪感を与える場合があると思われる。たとえば、外国人の日本語の音声に対する印象については、「聞いていて疲れる」など否定的な日本語母語話者の印象が報告されている（磯村 2009、内田 2006）。また、

一般に「関西弁」「津軽弁」と呼ばれる方言の間では、その社会的地位や評価がそれぞれ異なることが知られている（金田一 1961、井上 1993）。音声的には、前者はアクセントパターンに声調が合わさった性格を持ち、後者は語によって決まった F0 の変化、すなわちアクセントのパターンを持たない無アクセント方言だと言われている。ピッチの変化に注目する方言なのか否かは音声の評価において非常に重要な項目であろう。

(7) 方言によるピッチのレンジの解釈の違い

ピッチアクセントの方言同士であっても、高さに対する解釈や感じ方（敏感さ）に違いがあるという見解がある（川上 1995）。川上は、ピッチアクセントの 2 つの方言間で同一のアクセント型が存在しても、高さの変化に対するレンジに対する感度が異なる場合があると述べている。これは、方言間のアクセントの比較においては、単純にアクセント型だけでは解釈しきれないことを意味する。

ちなみに、日本語母語話者であっても、アクセントの高低を正確に分析できない人もいることが知られているが（杉藤 1983、鮎澤 1998、邊 2018）、何らかの不自然さを感じたときに、それが具体的にどのようなものか分析できるよう、調査者のインタビューや質問などで明確化する必要がある。単音レベルの要因も関わっている可能性があるため、F0 以外の要因を排除しなければならない。

(8) その他の考慮が必要な要因

以上のように、アクセントの逸脱が違和感に与える要因については様々な視点から検討されてきたが、郡 (2019)による調査では、標準日本語を話す日本語母語話者による 1 モーラから 3 モーラの語の音声に対し、本来と異なるアクセント型に変更した刺激音を標準日本語母語話者に聞かせて自然度を判定させた結果、特に頭高型と他のアクセント型（尾高型、平板型）に関しては相互のアクセント型が入れ替わった場合に不自然さが際立っていたと報告されている。これは、高さの移動方向が真逆であるため、違和感が大きくなったものと解釈できる。また、郡 (2019)によると、語の馴染み度については地名など日常的で身近な語か否かによって違和感はさらに大きかったことを示している。人名に対しては、具体的に検討はされていないものの、自分の名前など馴染みのある人名のアクセントを誤った場合も違和感は特に大きいと述べている。その他、アクセントの変化の途上にある語の旧式か新式か、ミニマルペアを持つ語においては相対的な頻用語かどうか、文環境の影響など、アクセントの逸脱による違和感には様々な要素を考慮すべきだと述べられており、大まかなカテゴリーで単純に扱うのでは信頼できる結果は得られないことがわかる。このように、郡 (2019)による調査はアクセントの逸脱について多くのことを示唆している。

次節では日本語母語話者によるアクセントの逸脱が聞き手に違和感を与える要因にはどのような影響があるか見てゆく。

3. 日本語教育におけるアクセントの違和感に関する先行研究

本研究では、学習者の音声については、韓国語母語話者について取り上げる。韓国語は、慶尚道方言や咸鏡道方言のような一部の方言を除けば、示差的アクセントのない無アクセント言語であり、語レベルで規定されたパターンはない（Jun 1993、福井 2000）。そのため、韓国語を母語とする日本語学習者は日本語の学習においてもアクセントに対する意識が希薄であり（大村 1969）、アクセントの概念につい

ての理解も困難である。単に「高低アクセント」「ピッチアクセント」「高さアクセント」等と教えられても、韓国語母語話者の日本語学習者（以下、学習者と称す）にとっては、日本語母語話者のような音の高さの処理の仕方そのものが実感し、身につけることの容易ではないものなのである。これは日本語母語話者の中でも無アクセント方言話者とも共通する点である（金田一 1961）。金田一 (1961)では、無アクセント方言母語話者がいわゆる標準日本語を覚えるために模索していることが述べられ、その心境として、東京方言話者の方言への差別意識や優越意識に憤るというエピソードが綴られている。井上 (1993)においても、東京方言、関西方言、東北方言のそれぞれの話者による互いの方言の評価においては、東北方言の無アクセント地域は否定的な評価だけが得られているということが述べられている。ソウル方言も無アクセント地域であるため、標準日本語の物差しで聞くと音声上の評価が低い可能性がある。日本語、韓国語の両語における無アクセント地域の話者が標準日本語のアクセントをどのように習得しているかに関する論考を関連づけながら検討すれば、多くのヒントが得られるのではないかと考えられる。

韓国語母語話者の日本語のアクセントの逸脱に関しては、中高型（大西 1991、戸田 1999、福岡 2008 等）ないし平板型（大西 1991、戸田 1999）になる傾向があり、頭高型の生成が困難であるとされている。知覚判断においても、頭高型は他のアクセント型より困難であることが報告されている（李・鮎澤・西沼 1997）。その原因については、韓国語の韻律の影響が考えられる[1)]。ソウル方言の場合、アクセント句は基本的に低い音調から始まって上昇してゆくパターンを示すため、日本語の語の生成においてもそのようなパターンになりやすいと考えられる（Jun 1993）[2)]。

たとえば、4 音節語では「低高低高」のように語末や句末を上昇させるアクセントは日本語母語話者には違和感を与えやすく、「とびはね音調（田中 2009）」に聞こえる場合もあり、相手の反応を頻繁にうかがうような印象を持たれる可能性がある。

その他、学習者のアクセントの逸脱に関する研究については、角道 (1990)、崔 (2003)、梁 (2015)の研究がある。角道 (1990)では、東京アクセントの逸脱について様々な観点から分析がなされており、韓国語母語話者と様々な言語を母語とする学習者に共通する特徴として次のように述べられている。まず、

---

1) ソウル方言のアクセントは分節音（平音、激音、濃音、摩擦音、有性音、母音）による影響が大きいが、日本語の場合に分節音による影響はそれほど大きくない（上野 1996、鄭・桐 1998）ことが知られている。韓国語母語日本語学習者は第 1 音節が高く話されるという報告もある（大坪 1987、助川 1993）。ソウル方言の場合、文頭や句頭において子音のマイクロプロソディー（micro prosody）が強化されやすく（Cho and Keating 2001）、平音（/p, t, k, ts/）、有声子音（/m, n, l/）、母音が来ると、上記のように第 1 音節は低いピッチの基本的なパターンになるが、激音（/p^h, t^h, k^h, ts^h/）、濃音（/p^*, t^*, k^*, ts^*, s^*/）、摩擦音（/s, h/）が来ると第 1 音節のピッチが高くなるパターンになるという（Jun 1993）。

2) Jun (1993)によると、ソウル方言のアクセントの最小単位は、アクセント句（Accentual Phrase）であるという。また、アクセント句の基本音調を高さで表しており（H : 高音調、L : 低音調）、高さは韓国語の韻律を決定づける上で重要であるとして検討を行なっている。アクセント句とは、1 つ以上の単独の語から形成され、一定のピッチパターンによって特徴づけられる単位のことを指す。Jun (1993)は、ソウル方言のアクセント句の基本音調は、1 音節の場合、1 音節内に LH の両方が現れ、上昇のピッチパターンをとる。2 音節のアクセント句では第 1 音節が L を第 2 音節が H をとる。3 音節のアクセント句では、第 1 音節が L で、第 3 音節が H となり、その間は上昇していく。4 音節以上の場合「LHLH」、5 音節以上になった場合は第 2 音節の H と最後からの 2 音節目の L の間をなだらかに下降していく「LH…LH」という韻律を持つ。

「東京アクセントには平板式の語彙が非常に多いが、外国人の発音にはどこかに下り目を置いて（すなわち起伏化して）発音することが多い（角道 1990, p. 139）」と述べているが、これは、平板型と起伏型との誤用に違和感が大きくなるという点で、郡 (2019)の結果と一致しており、崔 (2003)と梁 (2015)の知覚実験においても同様の結果が示されている。次に、「語末に特殊拍がある語で尾高型のものは東京アクセントには存在しないため、語末の特殊拍の次に下降があり助詞が続くというような発音を聞くと非常に違和感がある（角道 1990, p. 140）」という指摘では、学習者はモーラ単位ではなく音節単位でアクセントを捉えているため、アクセントを区切る単位が異なることを示している。関西方言はモーラ言語ではあるが、特殊拍に高い音調を置くことができる点（和田 1959、杉藤 1985）で学習者の音声に似ていると言える（例. 北海道：低低低高低低、近畿：低高低）。これらの音声に対して、東京方言話者は「変なところが上がると感じられる」との記述があり（和田 1959）、違和感が大きいことがわかる。

このような学習者に対してアクセントの重要性に気づかせるためには、アクセントを誤った場合の日本語母語話者の違和感について、データに基づいた具体的な資料の提示があれば教育上有効なのではないかと考える。

4. まとめと今後の課題

アクセントは、日常生活において仮名文字や漢字、数字、ローマ字などの文字とは異なり、記号として表記されないために変化しやすい性格を持ち、それが同地域における「ゆれ」「個人差」「世代差」そして「地域差」などにも現れている。また、アクセントはその人のアイデンティティーを表すものとして社会的な側面を有している。しかしながら、3~4 歳の標準日本語母語話者の幼児でもアクセントの正誤の判断ができるという報告がある（山田 2012）ことから、母語話者は未知のアクセントに対する違和感には敏感になりやすいことが予測できる。本稿の 2.と 3.では、その違和感の程度や印象がどのようなものなのか様々な角度から述べた。

アクセントの逸脱にどのような要因が関わっているかについては、日本語母語話者と学習者それぞれを切り離して分析するのではなく、同一の視点から検討することで、アクセントの基礎研究としてアクセントの全体像を明確にすることに貢献できるだろう。

謝辞

本論文を執筆する上で、多くのご助言をいただいた郡史郎先生に御礼申し上げます。

参考文献

【日本語による文献】

鮎澤孝子 (1998)「日本語学習者にとっての東京語アクセント」『月刊言語』27:1，pp. 70–75.

井上史雄 (1993)「価値の高い方言/低い方言」『月刊言語』22:9, pp. 20-27.

磯村一弘 (2009)『国際交流基金 日本語教授法シリーズ　第 2 巻音声を教える』ひつじ書房.

李明姫・鮎澤孝子・西沼行博 (1997)「ソウル出身日本語学習者の東京語アクセントの知覚」『日本学報』38, pp. 87-98.
上野善道 (1996)「アクセント研究の展望」『音声研究』211, pp. 27-34.
大坪一夫監修 (1987)『日本語の音声(I)(II)』アルク NAFL Institute 日本語教師養成通信講座.
大西晴彦 (1991)「韓国人の日本語のアクセントについて」『国際学友会紀要』15, pp. 52-60.
大村益夫 (1969)「朝鮮語の発音と構造-日本語との比較対照-」『講座日本語教育』5, pp. 113-129, 早稲田大学語学教育研究所.
角道正佳 (1990)「第 30 回外国人による日本語弁論大会予選通過者の日本語の東京アクセントからの逸脱度」『音声言語』Ⅳ, pp. 137-154.
川上蓁 (1995)『日本語アクセント論集』汲古書院.
金田一春彦 (1961)「＜アンケート＞アクセントは必要か－無アクセントの人のために－」『言語生活』117, pp. 38-47.
金田一春彦（監修）・秋永一枝 （編） (2017)『新明解日本語アクセント辞典 第 2 版』三省堂.
窪薗晴夫 (2006)『アクセントの法則』岩波書店.
窪薗晴夫 (2021)『一般言語学から見た日本語のプロソディー 鹿児島方言を中心に』くろしお出版.
窪薗晴夫・田中真一 (1999)『日本語の発音教室 理論と練習』くろしお出版.
郡史郎 (2018)「じょうずな読みとアクセント，イントネーション-非母語話者の読みの改善例-」『言語文化研究』45, pp. 179-190.
郡史郎 (2019)「アクセントとイントネーションの逸脱に対して感じる違和感について」『言語文化共同研究プロジェクト 2018』, pp. 17-28.
柴田武・柴田里程 (1990)「アクセントは同音語をどの程度弁別しうるか-日本語・英語・中国語の場合-」『計量国語学』17, pp. 317-327.
杉藤美代子 (1983)「アクセントの『ゆれ』」『日本語学』2:8, pp. 15–26.
杉藤美代子・田原広史 (1989)「統計的観点からみた大阪アクセント-東京との比較を中心に-」『音声言語』Ⅲ, pp. 143-165.
助川泰彦 (1993)「母語別に見た発音の傾向」『日本語音声と日本語教育』文部省重点領域研究成果報告書.
鄭恩禎・桐谷滋 (1998)「ピッチパタンが日本語の有声・無声の弁別に与える影響 ： 韓国語母語話者と日本語母語話者の比較」『音声研究』2 :2, pp. 64-70.
田中ゆかり (2009) 「『とびはね音調』とは何か」『論集』5, pp. 97-109.
崔壯源 (2003)「日本語らしさの許容度の実態調査 ： アクセント核のズレが影響する日本語らしさ」『第 17 回日本音声学会全国大会予稿集』, pp.213-218.
戸田貴子 (1999)「日本語学習者による外来語使用の実態とアクセント習得に関する考察-英語・中国語・韓国語話者の会話データに基づいて-」『文藝言語研究 言語篇』36, pp. 89-111.
稲垣滋子・堀口純子 (1979) 「東京語におけるアクセントのゆれ-地域差・意識と実態-」『ことばの諸相』pp. 72~80, 文化評論出.
福井玲 (2000)「韓国語のアクセント」『音声研究』5:1, pp. 11-17.

福岡昌子 (2008)「韓国人日本語学習者のアクセント習得における母語干渉-語頭破裂音を含む語のアクセント-」『三重大学国際交流センター紀要』3, pp. 45-59.

邊姫京 (2018)「日本語母語話者の東京語アクセント聞き取り能力」『音声研究』22:2, pp. 1-21.

山本寿子 (2012) 「誤ったアクセントで発音された単語に対する幼児の認知」『教育心理学研究』60, pp. 127-136.

湯浅質幸・松崎寛 (2004)「第 11 章アクセントは本当に意味の区別に役に立っているのか？」『音声・音韻探究法　日本語音声へのいざない』朝倉書店, pp. 111-122.

梁辰 (2015)「アクセントの誤用パタンが自然度評価に与える影響の比較」『第 29 回日本音声学会全国大会予稿集』, pp. 122-127.

和田実 (1959)「関西アクセントの印象」『音声学会会報』99, pp. 17-19.

【英語による文献】

Cho, T., P. Keating (2001) “Articulatory and acoustic studies on domain-initial strengthening in Korean,” *Journal of Phonetics*29:2, pp.155-190.

Jun, S. (1993) “The Phonetics and Phonology of Korean Prosody,” Ph. D. dissertation, Ohio State University.

Kubozono, H. (1996) “Syllable and Accent in Japanese--Evidence from Loanword Accentuation,” *Journal of the Phonetic Society of Japan* 211, pp. 71-82.